戦時中の秋田県小坂町（インタビュー　01 03 05）　　工藤　進

— 本当に小坂上空に米軍の爆撃機がやってくることがあったのですか？

「米軍の戦闘機が、操縦士の顔が見えるほど低く飛んで来たことがあったが、たぶん終戦直後のことだと思う（私が四歳のとき）。しかしとても怖かった。いまの東側の小屋があるほうに防空壕が掘ってあったが、入った覚えはない。爆撃にあったらひとたまりもなかったろう。裏山に廃坑となった坑道が二本あり、いざとなったらそこに入れば良い、と思っていた。電球は回りが濃い青で直下しか明るくならないものだった。電灯の笠も深い円筒形で光が外に漏れないように出来ていた。鉱山町の小坂は東京よりも電化が早く、こうした製品はいろいろあったのだと思う。この静かな青い光の記憶は今でもある。」

— しかし、小坂町は当時の「日本三大鉱山」の一つ、小坂鉱山があり、軍事的にも重要な場所であった筈です。それなのに、なぜ小坂は戦災をまぬかれることができたのでしょうか？

「小坂町はなぜ狙われなかったのか。終戦の日（八月十五日）が小坂鉱山爆撃の予定だったという噂が終戦後あったが、デマだと思う。小坂鉱山が爆撃されても村は反対側にあるので被害はなかったろう。小坂鉱山から十和田湖にかけて米軍の捕虜がいたことはたしか。今考えると生きた楯だったのかもしれない。彼らは十和田湖の道路建設に使用されていたそうだ。終戦後ほとんどすぐ、五、六人の、黒人を含めたよれよれのみなりの米軍捕虜が野菜やトマトなどを求めて私の家の前にきたことがある。母さんやばあさんは怖がって家の中に隠れたが、子供（4歳）の私はぜんぜん怖くなく、求められるまま、トマトやピーマン（とうがらしかもしれない）のようなものをあげたら、チョコレートやビスケットを貰った記憶があるが、それを食べた覚えはない。チョコレートをもらっても食べ方を知らないアフガニスタンの子供と同じだ。アメリカ人をはじめて見た印象は哀れな乞食。この印象はいまでも蘇る。彼らは米軍飛行機から落下されたこうしたお菓子はもっていたが、普通の野菜がなかったのだろう。落下食料にあたって死んだ人がいたという。

　小坂鉱山は当然米軍の破壊予定に入っていただろうが、勝利の近いことを確

信していた彼らは、戦後の復興に必要な鉱山を破壊しなかったのではないか。あるいは米軍はすでに朝鮮半島での中国、ロシア共産党との対決に備えていて、そのためにも銅はもっとも必要なものだった。実際、戦後すぐ朝鮮戦争がはじまり、日本の鉱工業はそれで大いにうるおうことになる。」

—1945年の終戦後も、小坂ではしばらく食糧難の時代が続いたようですが、
　当時の子供たちの食べ物は？

「戦争当時の食べ物。三歳、四歳、五歳ころの記憶は、ご飯に干し葉（大根の葉っぱを干したもの）やジャガイモなど入っていた。小さい私は珍しくておもしろがったが、ビスケットを飼っていたたぬきにやるような時代に育った兄貴（哲男）は情けない、といって泣いたそうだ。アカシヤの葉っぱを干して粉にして食べる用意をしていたが、食べた覚えはない。私はこのころの食事事情に暗い感じをもっていない。人の家の柿や、豆柿（冬に雪の中に落ちたもの）、雑炊のようなものも食べたが、おいしかった。畑、たんぼのない町と違って村だから、贅沢を言わなければひもじいことはなかった。当時としては恵まれていたと思う。川でカジカを取って来るとばあさんが私をほめ、それを焼いて「かやき」というみそ鍋（野菜がいっぱい入っている）にしてくれた。小学校に入ってから、弁当をもって来ない人が六年頃までクラスに必ず、数人はいた。しかし子供にはみな大きな希望があった。私の頃の中学時代は一学年七クラス、350人いた。その大半は卒業後「金の卵」ともてはやされ、おだてられ、秋田から遠く離れた首都圏で16歳から働いた。

—　そのころおじいちゃん（進の父）は？

　父の中国での従軍中の写真があるが、それがどこか（旅順？）、いまこのフランスではわからない。父は二度従軍したが、昭和18年、戦いが激しくなる前に除隊となったのは工藤家には幸せなことだった。父は軍隊を賛美したことは一度もない。よほど嫌だったのだろう。

（4月15日発行『梅の接木』- 工藤透、工藤京子編集 - より。一部、直しあり）